

# 国語

(1～13ページ)

## 注意

- 1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
- 2 解答は解答用紙にマークしなさい。  
ただし、使用しない解答欄があります。
- 3 解答用紙に受験番号と氏名を記入しなさい。
- 4 試験時間は六〇分です。
- 5 試験開始後、問題用紙に不備(ページのふぞろい・印刷不鮮明など)があったら申し出なさい。
- 6 問題の内容についての質問には、いつさい応じられません。

解答用紙の受験番号欄記入例

数字の位置	受 験 番 号				
	万	千	百	十	一
0	2	/	9	0	/
1	0	0	0	0	0
2	1	0	1	1	0
3	2	2	2	2	2
4	3	3	3	3	3
5	4	4	4	4	4
6	5	5	5	5	5
7	6	6	6	6	6
8	7	7	7	7	7
9	8	8	8	8	8
9	9	9	0	9	9

数字の位置に注意してマークしなさい

マーク式解答欄記入上の注意

1. 解答は、HBの黒鉛筆を使用して丁寧にマークしなさい。  
《マーク例》  
良い例 ●  
悪い例 ◐ ◑ ✕ ◒ ◓
2. 訂正する場合は、プラスチック消しゴムで、きれいにマークを消し取りなさい。
3. 所定の記入欄以外には、何も記入してはいけません。
4. 解答用紙を汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

I 次の問題文を読み、後の問いに答えなさい。

日本における食の近代は、幕末明治の西洋料理到来によって開始される。それは、肉料理に代表される新たなメニューの登場であるが、事はそれだけにどまらない。それは、タンパク質や炭水化物といった科学的栄養概念、さらには、栄養豊かで合理的、趣味の良い食の担い手として「主婦」を指定する「近代家族」像の普及にもつながった。とりわけ、長期の船中生活に対応した「肉じゃが」が海軍発祥を喧伝けんでんされているように、軍隊が栄養概念の普及に一役買っていたことは注目に値しよう。富国強兵のために国民の身体を合理的に管理しなければならぬという要請が、軍を食の近代化を推し進める重要なエージェントにした。さらには、第一次世界大戦で中国青島チンタウから連行されたドイツ人がソーセージやハム、洋菓子をもたらすなど、戦争が食に与える影響はマイキョアにいとまがない。

とはいえ、西洋料理の導入が X ではなかったことも忘れることはできない。西洋料理をきっかけに、さまざまな「日本化」の工夫が積み重ねられた。仏教の教えにより禁じられていた肉食にしても、じつさいのところさまざまな抜け道があり（落語「池田の猪いのしし買い」で知られるイノシシ肉の「薬食い」など）、そうした獣肉食をも含む和食の伝統の上に、西洋料理は接ぎ木され、変換された。スキヤキはその最たるものだろう。三大洋食と称されるトンカツ、コロッケ、カレーライスにしても、オリジナルとは異なるユニークな変換が施されており、「洋食」はむしろ日本料理の低位概念と捉えたほうが適切である。やや時代が下がるが、<sup>①</sup>中国発祥のラーメンがいつの間にか日本食を代表するメニューとなった経緯も、パラレルだろう。

こうした変化を実体験した一人が柳田國男である。柳田は「食物の個人自由」

〔『明治大正史』〕で、食べ物が、温かくなり、柔らかくなり、甘くなったことの三点が近代食生活の変革であったと指摘した。このうち甘さは、近代精糖業の発展とサトウキビの一大産地たる台湾の領有がもたらしたもののだが、温かさと柔らかさは、<sup>②</sup>火をめぐるハード・ソフト両面の転換によってもたらされたと喝破する。

家で食物を調理する清い火は、もとは荒神様の直轄する自在じざいかま鉤の下にあつたのである。その特別の保障ある製品でないと、これをたべて家人共同の肉体と化するに足らぬと言う信仰が、存外近い頃まで村の人の心を暗々裡あんあんりに支配していた。だから正式の食物はかえって配当が面倒なために、冷たくなつてからようやく口に届いたのであつた。炭櫃すびつや十能じゅうのうが自由に燠あまの火を運搬するようになって、なおこの考え方は久しく続いていた。それが最初にまず大きな器から取り分けて、別に進めるものを涼さますまいとする心遣いより、鍋とかユキヒラとかいうものがだんだんに発明せられ、結局今日のごとき鍋料理の隆盛を見るに至つたのである。炭焼き技術の普及が、これを助けたことはむろんであるが、それよりも根本の理由は家内食料の相異及びそれを可能ならしめたる火の神道の讓歩であつた。

ハレの食事がそうであるように、同じ火で調理された料理を人々が共食することが、本来のあり方だった。いわゆる「同じ釜のメシ」というやつだ。裏を返せば、一人だけのために調理し飲食することは、共同に反するふるまいとして非難の対象となった。だが、近代化にともなう生活スタイルの多様化は、人々が日常的に共食することを困難にし、一人一人がそれぞれのタイミングで個食する状況をもたらす。一人分を調理する加熱器具はその過程で工夫されたものだが、それ以上に、「火の神道の讓歩」すなわち「同じ火で調理された料理の共食」という規範に人々がとらわれなくなったことが、変化の根底にある

というのだ。慧眼けいがんといえよう。

ともあれ、近代が私たちの食を飛躍的に多様化したことは事実であり、食は栄養と機能と趣味が交差する、煩雑で厄介な領域となった。

いま一度、柳田の言葉を借りよう。

食物文化の色や音響と違っている特徴は、以前に大いなる統一があつて、後次第に分立の勢いを示していることである。流行が再び各人の趣味を征服し得ず、また特に一種の強烈なるものによつて、音のごとく他の群小を威圧し得ないことである。何でも食わねばならぬという大きな必要から、新たに時代の標準というものを設けてみることにむつかしい点である。従つて品種は年とともに激増して、いよいよ一般の観察が下しがたくなるのである。

食が複雑化のイットイットをたどつていけるとするこの指摘は、昭和初年からそのまま現在まで続いている。その変化を概観すると、①自製品から既製品へ、②共食から個食へ、③栄養補給から嗜好充足へ、とまとめることができる。これらにツウテイツウテイするのが、モビリティの拡大——ヒトとモノと情報の高速移動——であり、とどまるところを知らない近代世界システムの展開であるといえよう。

その高速化する食の最前線にファストフードがある。一口にファストフードといつても、ハンバーガー、牛丼、回転寿司など数多くのメニューがあり、また、インスタント、レトルト、冷凍食品など多くの加工・流通技術が関係しているが、総じていえば、食をあたかも工業製品のように生産する体制であり、「マクドナルド化」といつた言葉に象徴される食の効率化、合理化、均質化が極限まで推し進められていくことになる。そうしたなか、回転寿司の品目とは異なる「代替魚」が次々と現れては乱獲によつて消えていくなど、ファスト

フードが惹起じやくきする人体と生態への負荷が懸念されるに至っている。

こうした状況に抗するのがスローフードの試みだ。村ごとに風味の異なるチーズやワインといった伝統食がファストフードに押され危機に瀕ひんしていることを憂慮したイタリアのカルロ・ペトリニは、①伝統食の保存、②生産者の保護、③消費者の啓蒙けいもうの三つを柱とするスローフードを提唱、一九八九年、パリで国際スローフード協会設立大会を開催し、「スローフード宣言」を採択する。風土に根差した食文化を伝えていくためには、その生産者を守ることがカンヨウカンヨウであり、そのためには、消費者の適正な消費行動が不可欠というわけだ。日本でも同様に「地産地消」が提唱され、二〇〇五年には食育基本法が施行されている。

ただ厄介なのは、スローフードのキャッチフレーズが、容易にファストフードのマーケティングに回収されてしまう点だ。食の生産流通のプロセスが、安全性の確保や伝統の保全、労働環境の適正性にどの程度配慮しているかは個別に検証されるべきだが、スローフード的であることが商品③を差別化する一種の記号となりかねない状況が、伝統食とその担い手の現場を覆い隠してしまう危険性には、しっかりと気をつけておきたい。「和食」のユネスコ無形文化遺産登録（二〇一三年）も、日本の風土のなかで築き上げられた和食独自の美学と効用が評価されたといえないわけではない一方、素材の上でも担い手の上でも多くの困難を抱えており、「和食」の内実はかつてないほどに Y としてきている。「ファスト」と「スロー」と「スローのようなファスト」のせめぎあいには、私たちの食は揺らぎ続けているといえよう。

それでも、私たちは食べ続けなければならない。さて、何を食べようか。

（菊地暁『民俗学入門』より。一部改変）

【注】○荒神様——ここでは台所など火を使う場所にまつられる「かまど神」のこと。

○自在鉤——囲炉裏やかまどの上につるし、それにかけた鍋や釜などの高さ  
を調整する道具。

○十能——炭火を運ぶ道具。

○燠の火——赤く熱した炭。

○ハレ——儀礼や祭などの「非日常」的な場。

問一——線部ア～エのカタカナの部分と同じ漢字を用いるものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

1 ア 1 群雄カッキョの時代。

2 キョマンの富を得る。

3 キョドウ不審な人物。

4 トッキョを出願する。

2 イ 1 帰省のトジ友人を訪ねた。

2 再建をキトする。

3 心境をトロする。

4 努力がトロウに帰す。

3 ウ 1 テイサイを取りつくろう。

2 在庫がフツテイする。

3 法にテイシヨクする恐れがある。

4 ケンテイ試験を受ける。

4 エ 1 カンカできない問題。

2 プロジェクトをカンスイする。

3 カンダイな処置を考える。

4 カンゾウは五臓の一つだ。

問二 空白部X・Yに入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

5 X 1 日本からの要請 2 単純な一方通行

3 栄養管理上の必要性 4 食の近代化

6 Y 1 古色蒼然そうぜん 2 泰然自若 3 曖昧模糊もこ 4 得手勝手

問三 線部の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

7 1 記憶を思いおこさせる 2 問題を引きおこす

3 好奇心をかきたてる 4 依存状態にする

問四 線部①の内容として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

8 1 日本における食の近代化が、幕末明治の西洋料理の到来によって開

始されたのとはほぼ同時期にラーメンも中国から移入され、日本における新たなメニューとして定着している。

2 第一次世界大戦で中国青島から連行されたドイツ人がソーセージやハム、洋菓子を日本に持ち込んだように、ラーメンもまた戦争によって日本にもたらされたものである。

3 西洋料理が日本で変化を遂げ、もとの料理と異なる日本料理の一部となつて定着しているのと同様の過程を経て、中国発祥のラーメンが日本料理となつている。

4 西洋料理が日本に定着する過程で、さまざまな工夫が積み重ねられたのに対し、ラーメンは中国発祥のオリジナル性をそのまま残すことで日本の代表的なメニューとなつている。

問五 線部②の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

9 1 鍋やユキヒラの発明によって調理が容易になったことと、良質な砂糖が入ってきたことから鍋料理の味が家庭ごとに工夫されていったこと。

と。

2 煮炊きをするための鍋が普及したことと、家族を構成している年齢により食物に対する好みの変化が起こったこと。

3 火を安全に管理することの重要性が浸透したことと、人びとの火に対する信仰が薄れたこと。

4 燃料や調理器具などが進化したことと、同じ火で調理された料理を共食すべきだという考えに変化が生じたこと。

問六 線部③の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

10 1 「スローフード」というイメージの単純化により、内実を伴わない商品まで価値があるかのように扱われてしまう状況。

2 「スローフード」という言葉が安易に人びとの消費行動をかき立てることで、ファストフードの将来が危機に瀕する状況。

3 「スローフード」が流行することで、インスタント、レトルト、冷凍食品化がすすみ、ファストフードと一体化していく状況。

4 「スローフード」普及のために生産を効率化させることで、ファストフードのように味が均質化する状況。

問七 問題文の内容と合っているものを、次の中から二つ選びなさい。

11 12

1 日本は戦時下において国民の身体の強化という目的のために、軍隊主導により栄養価の高い食物である肉を食べることを推し進めていった。

2 日本の風土の中で長い時間をかけて築き上げられてきた和食という食文化も、現在では西洋料理から独自に発展した洋食の下位概念として複雑で多様なものになっている。

3 かつての日本では、人びとが同じ火で調理された料理を共食することにより重要な意味を見いだしており、そこから逸脱する行為は共同体維持の観点から非難されることであった。

4 「同じ釜のメシ」といった表現は、荒神様の直轄する自在鉤の下の貴重な火を分け合うことで擬似的な家族として客人を受け入れるといった考え方にもとづいている。

5 日本における食の近代化は、家族の栄養管理や食生活の合理化を担う「主婦」というイメージを定着させ、「近代家族」像を普及させることになった。

6 食文化が色や音響と異なっているのは、食べることが生きることとつながっており、個人的な趣味とは結びつかない点である。

問八

13

(1) 柳田國男が、ある地域における伝承を筆記・編纂した作品を次の中から一つ選びなさい。

1 澤東綺譚 2 遠野物語 3 檜山節考 4 あすなる物語

(2) 柳田國男と交流のあった島崎藤村の詩集を次の中から一つ選びなさい。

14 1 若菜集 2 測量船 3 悲しき玩具 4 春と修羅

## II 次の問題文を読み、後の問いに答えなさい。

私は、昭和二十年敗戦の冬、北満でソ連軍に抑留され、翌二十一年初めソ連領中央アジアの一收容所へ送られた。この昭和二十一年から二十二年へかけての一年は、ソ連の強制收容所というものをまったく知らない私たちにとつては、未曾有の経験であった。入所一年目に私たちが経験しなければならなかったかかずの苦痛のうち最大のもの徹底した飢えと、しばしば夜間におよぶ苛酷な労働である。当時ウクライナ方面で起こった飢饉のため、全般的に食糧事情が悪化しており、まして私たちは一般捕虜とちがい、大部分が反ソ行為の容疑者からなる民間抑留者の集団であったため、食糧にたいするコリョが十分行われなかったとしても不思議ではない。加えて、どこの收容所にも見られる食糧の横流しが、ここでは收容所長の手で組織的に行われ、これが給養水準の低下に拍車をかけた。

このため入所後半年ほどで、私たちのあいだには、はやくも栄養失調の徴候があらわれはじめた。

こういった事情のもとで、おそらくはこの收容所に独特の、一種の〈共生〉ともいうべき慣習が生まれ、またたくまに收容所全体に普及した。〈共生〉がヨギなくされた動機には、收容所自体の管理態勢の不備のほか、一人ではとても生きて行けないという抑留者自身の自覚があったと考えてよい。まず、この收容所は民間抑留者が主体であつて、大部分が食器を携行して入ソした一般捕虜の收容所にくらべて、極端に食器がすくない。したがつて食事は、いくつかの作業班をひとまとめにして、順ぐりに行われることになるが、そのさい食器（旧日本軍の飯盒）を最大限に活用するために、二人分を一つの食器に入れて渡す。これを受けとるために、抑留者はやむをえず、二人ずつ組むことに

なつたが、私たちはこれを〈食缶組〉と呼んだ。これがいわば、この收容所における、〈共生〉のはじまりであるが、爾後この共生は收容所生活のあらゆる面にズイハンすることになった。

食缶組をつくるばあい、多少とも親しい者と組むのが人情であるが、結局、親しい者と組んでも嫌いな者と組んでも、おなじことだということだが、やがてわかつた。というのは、食糧の絶対的な不足のもとでは、食缶組の存在は、おそれればやかれ X を拡大させる結果にしかならなかつたからである。

一つの食器を二人でつつきあうのは、はたから見ればなんでもない風景だが、当時の私たちの這いまわるような飢えが想像できるなら、この食缶組がどんなにげいしい神経の消耗であるかが理解できるだろう。私たちはほとんど奪いあわんばかりのいきおいで、飯盒の三分の一にも満たぬ粟粥を、あつというまに食い終わつてしまふのである。結局、こういう状態がながく続けば、腕ずくの争いにまで到りかねないことを予感した私たちは、できるだけ公平な食事がとれるような方法を考えるようになった。まず、両方が厳密に同じ寸法の匙を手に入れ、交互にひと匙ずつ食べる。しかしこの方法も、おなじ大きさの匙を二本手に入れることがほとんど不可能であり、相手の匙のすくい加減を監視するわずらわしさもあつて、あまり長つづきしなかつた。つぎに考えられたのは、飯盒の中央へ板または金属の〈仕切り〉を立てて、内容を折半する方法である。しかしこの方法も、飯盒の内容が均質の粥類のときはいいが、豆類などのスープの時は、底に沈んだ豆を公平に両分できず、仕切りのすきまから水分が相手の方へ逃げるおそれもあつて、間もなくすたつた。さいごに考えたのは、缶詰の空缶を二つ用意して、飯盒からべつべつに盛り分ける方法である。さいわいなことに、ソ連の缶詰の規格は二、三種類しかないので、寸法のそろつた空缶を作業現場などからいくらでも拾つてくることができる。分配は食缶組の一人が、多くのばあい一

日交代で行ったが、相手に対する警戒心が強い組では、ほとんど一回ごとに交代した。この食事の分配というのが大へんな仕事で、やわらかい粥のばあいはそのまま両方の空缶に流しこんで、その水準を平均すればいいが、粥が固めのばあいは、押しこみ方によって粥の密度にいくらでも差が出来る。したがって、分配のあいだじゅう、相手はまたたきもせず、一方の手許を凝視していなければならぬ。さらに、豆類のスープなどの分配に到つては、それこそ大騒動で、まず水分だけを両方に分けて平均したのち、ひと匙ずつ豆をすくつては交互に空缶に入れないといけない。分配が行われているあいだ、相手は一言も発せず分配者の手許をにらみつけているので、はた目には、この二人が互いに憎みあつていゝかと思えないほどである。こうして長い時間をかけて分配が終わると、つぎにどっちの缶を取るかという問題がのこる。これにもいろいろな方法があるが、もつとも広く行われたやり方では、まず分配者が相手にうしろを向かせる。そして、一方の缶に匙を入れておいて、匙のはいつた方は誰が取るかとたずねる。相手はこれにたいして「おれ」とか「あんた」とか答えて、缶の所属がきまるのである。このばあい、相手は答えたらすぐうしろをふり向かなくてはならない。でないと、分配者が相手の答えに応じて、すばやく匙を置きかえるかも知れないからである。食事の分配が終わつたあとの大きな安堵感<sup>あんど</sup>は、実際に経験したものでなければわからない。この瞬間に、私たちのあいだの敵意や警戒心は、まるで嘘<sup>うそ</sup>のように消え去り、ほとんど無我に近い恍惚状態<sup>こうごう</sup>がやつてくる。もはやそこにあるものは、相手にたいする Y であり、世界のもつともよろこばしい中心に自分があるような錯覚である。私たちは完全に相手を黙殺したまま、「一人だけの」食事を終わるのである。このようなすさまじい食事が日に三度、かならず一定の時刻に行われるのだ。

共生の目的は他にもある。たとえば作業のときである。私たちの労働は土工

が主体であつたが、土工にあつては工具（スコップ、つるはし）の良否が徹底してものをいう。それは一日の体力の消耗に、直接結びつくからである。毎朝作業現場に到着するやいなや、私たちは争つて工具倉庫へとびこむのだが、いちはやく目をつけた工具を完全に確保するためには、最小限二人の人間の結束が必要である。食事のときあれほど警戒しあつた二人が、ここでは無言のまま結束する。

こうして私たちは、ただ自分ひとりの生命を維持するために、しばしば争い、結局それを維持するためには、相対するもう一つの生命の存在に、「耐え」なければならぬという認識に徐々に到達する。これが私たちの〈話し合い〉であり、民主主義であり、一旦成立すれば、これを守りとおすためには一歩も後退できない約束に変わるのである。これは、いわば一種の掟<sup>おきて</sup>であるが、立法者のいない掟がこれほど強固なものだとは、予想もしないことであつた。せんじつめれば、立法者が必要なときには、もはや掟は弱体なのである。

私たちの間の共生は、こうしてさまざまに混乱や困惑をくり返しながらかわつて行こうとする意志の定着化の過程である。（このような共生はほぼ三年にわたつて継続した。三年後に、私は裁判を受けて、さらに悪い環境へ移された。）これらの過程を通じて、私たちは、もつとも近い者に最初の敵を発見するといふ発想を身につけた。たとえば、例の食事の分配を通じて、私たちをさいごまで支配したのは、人間に対する（自分自身を含めて）つよい不信感であつて、ここでは、人間はすべて自分の生命に対する直接のキョウエイ<sup>キョウエイ</sup>として立ちあらわれる。しかもこの不信感こそが、人間を共存させる強い紐帯<sup>きゆうたい</sup>であることを、私たちはじつに長い期間を経てまなびとつたのである。

強制収容所内での人間的憎悪のほとんどは、抑留者をこのような非人間的な状態へ拘禁しつづける収容所管理者へ直接向けられることなく（それはある期



間、完全に潜伏し、潜在化する）、おなじ抑留者、それも身近にいる者に対しあらわに向けられるのが特徴である。それは、いわば一種の近親憎悪であり、無限に進行してとどまることを知らない自己嫌悪の裏がえしであり、さらには当然向けられるべき相手への、潜在化した憎悪の代償行為だといってよいであろう。

こうした認識を前提として成立する結束は、お互いがお互いの [ Z ] であることを確認しあつたうえでの連帯であり、ゆるすべからざるものを許したという、苦い悔恨の上に成立する連帯である。ここには、人間のあいだの安易な、直接の理解はない。なにもかもお互いにわかってしまっているそのうえで、かたい沈黙のうちに成立する連帯である。この連帯のなかでは、けつして相手に言つてはならぬ言葉がある。言わなくても相手は、こちら側の非難をはつきり知つている。それは同時に、相手の側からの非難であり、しかも互いに相殺されることなく持続する憎悪なのだ。そして、その憎悪すらも承認しあつたうえでの連帯なのだ。この連帯は、考えられないほどの強固なかたちで、継続しうるかぎり継続する。

これがいわば、孤独というものの真のすがたである。孤独とは、けつして単独な状態ではない。<sup>③</sup> 孤独は、のがれがたく連帯のなかにはらまれている。そして、このような孤独にあえて立ち返る勇気をもたぬかぎり、いかなる連帯も出発しないのである。無傷な、よろこばしい連帯というものはこの世界には存在しない。

(石原吉郎『忘郷と海』より。一部改変)

【注】 ○北満——中国大陸の一部。

○飯盒——野外における調理に使用する携帯用炊飯器・食器。

○爾後——その後。

問一——線部ア～エのカタカナの部分と同じ漢字を用いるものを、次の中から

それぞれ一つずつ選びなさい。

15 ア 1 コイに義務をおこたる。

2 円安にコオウして物価が上がる。

3 「日頃のゴアイコに感謝申し上げます。」

4 後輩をコブする。

16 イ 1 すぐれたギリヨウの持ち主。

2 大臣の発言がブツギをかもす。

3 被災地にギエン金を送る。

4 チキユウギを購入する。

17 ウ 1 ピアノでパンソウをする。

2 上級生がモハンを示す。

3 パンナンを排して参加する。

4 慎重にハンケツを下す。

18 エ 1 イフウドウドウ

2 ウイテンペン

3 イキシヨウテン

4 イイダクダク

問二 空白部X、Y、Zに入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

19 X 1 序列の意識 2 相互間の不信

3 〈共生〉という依存 4 管理者への警戒

20 Y 1 無意識の感謝 2 ただの連帯感

3 完全な無関心 4 暴力的な憎しみ

21 Z 1 感情の一番の理解者 2 共通の敵をもつ者

3 生存を認証する者 4 生命の直接の侵犯者

問三 線部の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

22 1 わかりやすく言い換えるならば 2 最後まで深く考えたと

3 体験から結論づけるならば 4 卑近な言い方をする

問四 線部①の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

23 1 自分の生命を維持するために相対する者に対して抱いた混乱や困惑を克服することで、徐々に連帯感が生まれていくということ。

2 憎むべき相手であっても、問題が起きる度に〈話し合い〉を行うと

いった民主主義的な手続きを踏むことによつて、良好な関係を保ちつ

づけることができるようになること。

3 自分の生存の手段を確保するためには、憎むべき相手と争いながら

も相手の存在をこらえなければならぬという認識にいたること。

4 一人ではとても生きていけないという抑留者自身の自覚によつて、

憎むべき相手を服従させるためには相手を理解するしか方法はないと

いう境地に達すること。

問五 線部②の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

24 1 お互いに決して相手を信用しないという前提に立つことが、結果的に共に生き延びるためのつながりになっている。

2 お互いが相手を強く憎んでいることを知っていると、いつ連帯が破

られてもおかしくはないという極度の緊張感によつて結果的に生命を

存続させることができる。

3 憎むべき相手と共生せねばならない状態が長く続くと、激しい神経

の消耗が生じるため、争いを忌避する掟を定めようとする。

4 敵意や警戒心をひととおりぶつけ合った後には、憎しみが嘘のよう

に消え去り、ほとんど無我に近い恍惚状態がやってくることをお互い

に理解している。

問六 線部③と考える理由として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

25 1 お互いに不信感を抱き、相手とは絶対につながることができないと

いう認識が連帯の条件になっているから。

2 完全に相手を黙殺しながら、世界のもつともよろこばしい中心に自

分がいるような錯覚に日々陥っているから。

3 食事における争いや労働の能力差により、人間は人と共生すること

は無理であることを毎日実感しているから。

4 収容所の管理者こそが憎むべき相手であるのに、共生する人間を憎

むことに置き換えている個としての自分のどうしようもなさと同様

うことになるから。

問七 線部④の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

26 1 抑留者自身は、抑留者自身を救済するために、抑留者自身を救済する

べきという自覚をもち、抑留者自身を救済するために、抑留者自身を救済

するべきという自覚をもち、抑留者自身を救済するために、抑留者自身を救済

するべきという自覚をもち、抑留者自身を救済するために、抑留者自身を救済

問七 問題文の内容と合っているものを、次の中から二つ選びなさい。

27 26

- 1 作業現場に到着すると、なるべく使い勝手の良い工具を確保するために、食缶組で培われた信頼関係に基づいた役割分担が必要となる。
- 2 収容所では、食事の配分や作業をめぐって収容者同士の約束が生まれ、一旦成立すると、それを守りとおすために一歩も引くことができない掟となっていた。
- 3 収容所で生命を維持するためには、収容所管理者がいないところで収容者全員による〈話し合い〉の場を設け、民主的なルールを策定することが重要である。
- 4 食事は等分に分けることができないことを誰もが知っていたため、分配後の缶の所属は分配者が決めていた。
- 5 収容所では、収容している側による食糧の横流しが組織的に行われていたこともあって、抑留者への食糧はより不足し、栄養も満足にとれないといった過酷な状態を強いられていた。
- 6 抑留者の食事の配分は二人ひと組で行われるが、相手に対する警戒心が強い人と組むと毎回争いが起こり体力を消耗するため、最初にとのような人を選ぶのが最も重要である。

### Ⅲ 次の問題文を読み、後の問いに答えなさい。

〔以下は、清少納言が左衛門尉橘則光や左中将源経房など一部の人のみ居場所を知らせて宮中から下がっていた時期の話である。〕

左衛門尉則光が来て、物語などするに、「昨日宰相の中將の参り給ひて、『いもうとのあらむ所、さりともしらぬ』やうあらじ。言へ」といみじう問ひ給ひしに、さらに知らぬよしを申ししに、あやにくに強ひ給ひしこと」など言ひて、「あることは、あらがふはいとわびしくこそありけれ。ほとほと笑みぬべかりしに、左中將のいとつれなく知らず顔にてゐ給へりしを、かの君に見だにあはせば笑ひぬべかりしにわびて、台盤の上に海藻のありしを、取りて、ただ食ひに食ひまぎらはししかば、中間に、あやしの食ひ物やと、見けむかし。されど、かしこう、それにてなむそことは申さずなりにし。笑ひなまししかば、不用ぞかし。まことに知らぬなめりとおぼえたりしも、をかしくこそ」など語れば、「さらにな聞こえ給ひそ」など言ひて、日頃久しうなりぬ。

夜いたくふけて、門をいたうおどろおどろしうたたせば、何の、かう心もなう、遠からぬ門を高くとたくらむと聞きて、問はずれば、滝口なりけり。「左衛門尉の」とて文を持て来たり。みな寝たるに、火取りよせて見れば、「明日御読経の結願にて、宰相の中將、御物忌に籠もり給へり。『いもうとのあり所申せ、いもうとのあり所申せ』と責めらるるに、ずちなし。さらにえ隠し申すまじ。さなむとや聞かせたてまつるべき。いかに。仰せにしたがはむ」と言ひたる。返り言は書かで、海藻を一寸ばかり紙に包みてやりつ。

さて、後来て、「一夜は責めたてられて、すずろなる所々になむ率てありきたてまつりし。まめやかにさいなむに、いとからし。さて、などともかくも御

返りはなくて、すずろなる海藻の端をば包みて給へりしぞ。あやしの包み物や。人のもとにさる物包みておくるやうやはある。取りたがへたる」と言ふ。いささか心も得ざりけると見るが憎ければ、物も言はで、硯にある紙の端に、

かづきするあまのすみかをそことだにゆめいふなどや海藻を食はせけむと書きて差し出でたれば、「歌詠ませ給へるか。さらに見侍らじ」とて扇ぎ返して逃げていぬ。

〔枕草子〕より。一部改変

【注】 ○宰相の中將——藤原齊信。

○いもうと——親しい女性。当時、則光と懇意だった清少納言を周囲がこう呼んだらしい。

○あることは——以下、「をかしくこそ」までは則光の発話。

○海藻——この二字で「め」と読む。食用の海藻類。乾燥したものが台盤に用意されていた。

○中間——食事時でもない中途半端な時刻。

○滝口——滝口の武士。

問一 線部A～Dの解釈として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

28 A 1 あんのじょう 2 それとなく

3 きびしく 4 いぶかしがつて

29 B 1 当惑して 2 許しを求めて

3 何くわぬ顔で 4 満足して

30 C 1 どうしようもない 2 容赦ない

3 手段を選ばない 4 道理に合わない

31 D 1 殺風景な 2 何の関係もない

3 わずかばかりの 4 不本意な

問二 線部ア～エについて同じ種類の助動詞の組み合わせを示したものを、次の中から一つ選びなさい。

32 1 アとイ 2 アとウ 3 イとエ 4 ウとエ

問三 給へ の敬意の対象として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

33 1 則光 2 斉信 3 清少納言 4 滝口

問四 線部①の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

34 1 海藻だけが置いてあるのは笑いを誘うので、片付けておくべきだったということ。

2 笑いを必死にこらえたものの、そこまでする必要はなかったということ。

3 何とか笑わずに済んだので、海藻を食べなくてもよかったということ。

4 もし笑っていたら、隠し事をする努力が無駄になってしまっただろうということ。

問五 線部②で話者が言おうとした内容として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

35 1 嘘をつくのをやめてほしいということ。

2 自分の居場所を口外しないでほしいということ。

3 今後この件について報告する必要はないということ。

4 挑発的な行動は慎んでほしいということ。

問六

——線部③の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

36

- 1 斉信に正直に話して良いか、許可を得ようとしているということ。
- 2 斉信に海藻の在り処<sup>か</sup>だけでも話して良いか、許可を得ようとしているということ。

- 3 斉信に経房のことを話して良いか、許可を得ようとしているということ。

- 4 斉信に反抗的な態度をとり続けても良いか、許可を得ようとしているということ。

問七

——線部④の行為によって相手に伝えたかった内容として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

37

- 1 気持ちを落ち着かせてほしいということ。

- 2 感謝しているということ。

- 3 ごまかし続けてほしいということ。

- 4 ほんの少しで良いから誠意を見せてほしいということ。

問八

問題文の内容と合っているものを、次の中から二つ選びなさい。

38

- 1 則光は清少納言の詠んだ歌を見て、海藻を贈られた理由をようやく理解した。

39

- 2 則光が海藻を食べていた時、経房も同席していた。

- 3 清少納言は海藻を包んだ紙に則光への返事となる和歌を添えた。

- 4 深夜、滝口の武士が則光の手紙を清少納言のもとに届けた。

- 5 則光は海藻を食べさせられたことに憤慨し、清少納言に手紙で不快感を訴えた。

- 6 斉信に問い詰められた則光が助けを求めた時、経房は状況を理解していなかった。

問九

清少納言が活躍していた時代に成立した作品を、次の中から一つ選びなさい。

40

- 1 方丈記

- 2 十六夜日記

- 3 折たく柴の記

- 4 和泉式部日記